

二の足をステップ 二の舞をダンス

ダンスを巡るドラマチックな
3テキスト

オカフジ ジュンイチ

ロミオはまだ死んでいない_____1

ドロッセルマイヤの種明かし___7

カウボーイの踊り_____11

ロミオはまだ死んでいない



バレエにしか心地よい居場所を求めることができなくなってしまった。

人生の黄昏時を迎える日本人の男が、こんな心境を吐露するのは、鼻持ちならない言い振りであることは承知の上で、しかし、このことに少しなりと理解ある想像を及ぼしていただいて、皆様がそれぞれお持ちのバレエに関する記憶を寄せ集めていただかないと、稀有な主体による愛しい体験談をお目通しいただく意義はない。

ホームページを探せば、どんな季節でも、関西のどこかの公共ホールでどこかのバレエ教室の発表会が開かれているのを見つけることができる。それらはほぼ例外なく入場無料で、招待状を関係者から入手する必要もない。観客が楽しむのではなくて、舞台の上の人が楽しむのだから、舞台の上の人が開催コストを負担する。

主役はバレエ教室に通う未成年の子供たち。出演者の親族友人など近しい人しか見にきてくれないのだから、その人たちに有料のチケットを手渡すのは、はばかられる。公共ホールの使用料は、入場者から料金をとらなければ、減額されることもあり、そのためにも入場料を無料にする価値がある。

係累が登場しなくても、また、技術がどんなレベルのものであっても、私はバレエであることゆえに充分楽しめることもあって、バレエ教室や公共ホールのホームページのスケジュールを定期的に点検して、発表会の情報を探すのが、月々の習慣となっている。

バレエが好きで好きでバレエ教室でレッスンを受けることはもとよりバレエに接してさえいれば、日々の泡が洗い流される。

平成二二年五月二四日。

いつものように、バレエ発表会案内を見つけるために、公共ホールのホームページを巡回していたら、兵庫県立芸術劇場のサイトで、この夏に英国ロイヤルバレエ団の「ロミオとジュリエット」の公演があり、出演者オーデ

ィションの参加募集告知の記事を発見した。男性二名、内カバー十一名（番人・街人・僧など）。女性十一名、内カバー一名（街人・舞踏会の女性）。男の子二名が募集の内容。通行人的なエキストラのオーディションである。男性・女性・男の子のそれぞれ身長・胸囲・腹囲の衣装サイズ適合が選考条件として記載されていて、かつ、リハーサル・ゲネプロ・本番すべてに参加できることの当然の条件が加えられているが、これだけの条件ならクリアできるので、応募してみることにした。こんな機会は、そうそうあるものではない。

本日、バレエ教室のレッスンの前にレッスン着の黒タイツ黒タンクトップ姿になっての全身写真撮影を行い、履歴書を作成して、メールで申し込みを済ます。

むずむずします

受かったら、受かってしまったら、人生変わるか、かも（笑）

六月二三日。

申し込んだオーディションの書類選考結果が合格であることのメールがあった。そのメールの最後に、こんな警告文が補足的に添えられていた。

「インターネットの掲示板・SNS・ブログ・ホームページなどに現場で知り得た情報（オーディションやリハーサル内容など）の掲載、写真を出すことは禁止します。」の注釈がついている。

ということで、
本日はここまで

七月一日木曜日

オーディション当日。

映画の日だったので、終日の休暇取得を自己決裁し、時間調整も兼ねて梅田で映画を見てから、おもむろに会場のある阪急西宮北口駅に向かった。

楽屋口の受付では、応募者と思しき方々が

手持ち無沙汰にたむろしていた。日本人よりも欧米からの方が数多くいて、それも体躯が立派な若者ばかりで、場違いなところに舞い込んだかと気後れさせられた。定刻に受付が始まり、バックステージ・パスを頂いて、楽屋入りする。

入ってすぐの廊下曲がり角に廣田神社のミニチュアであるとの説明書きが添えられた神棚が備え付けてあった。公共ホールでこういうものを見るとは新発見だった。出演者や舞台スタッフ向けの食堂も設けられていて、評判どおりの素晴らしいホールに圧倒される。ダンス初めて十年、この間、いくつかのホールの楽屋を利用したが、ここは、別格だった。バックステージを抜けて、ホールフロアのピロティに出ると、すでに女性陣が整列されていて、バレエ団の首脳と思しき一行が列の前を行き来して、首実検をしていた。選考は、ただ応募者の外観を比較観察するだけだった。男性陣も整列させられた。

バレエのレッスンでしっかり染み付いている立ち姿、足は四番ポジションにして膝を閉める、上体は、胸をそらすのではなくて肩甲骨を閉じることで胸を立てるイメージで身構えて、スタンバイした。バレエのレッスンで何度も注意されていて、そのおかげで、背筋は相当矯正されることとなり、今、先生に指摘されることなく、おのずと正しい姿勢を意識できる。

選考者一行は女性の列の最後尾の方まで進み、女性の選考を終え、男性の列に振り返り、私に接近してきた。

列の一番後ろに並んだ私が逆に選考の一番手になった。一行の中心にいた高齢白髪の女性が目の前に立って、ニッコリと目線を投げてくれ、おもむろに合格のカードを渡してくれた。瞬時のできごとだった。満面の笑顔をその女性に返したことだろうと思うが、その瞬間の私の反応は記憶していない。

選考終了後、選ばれた面々は、バックステージの来た通路と別の通路へ案内された。廊下にはロンドンから空輸されてきた木製行李

が並べられ、色も意匠もとりどりの様々な衣装が露出されていた。

男性陣は男性エキストラ用の衣装部屋に通され、私を含めた数人には、白のブラウスとその上衣とタイツと同じタイプの靴が試着の上、配分された。上衣は甲冑を布製にしたような重厚なものだった。役柄に応じて衣装は異なるのだが、役柄自体がわからないまま、ただただ、気分が高揚するだけだった。

その後舞台に案内され、出番と演技の説明が通訳付きで行われた。

舞台には大きな屋根付の御座が置かれていた。籠だった。その周りに同じ衣装を割り当てられた男たちが集められた。御座にはカーテンのようにベルベットのドレープが左右後方に掛けられて、濃茶一色の木枠の下には膝より低い高さに金属のポールが二本平行に渡してあった。ポールは、鉛のような素朴な色あいで、照明が当たっても、輝く心配はない。

その籠を担ぐ人足役が私を含む籠を取り巻く男たちの役柄だった。四人で一台の籠を担ぎ、籠の中の貴婦人を舞台に運び入れるのが仕事と日本人スタッフから聞かされた。

登場・退場のタイミングは、ポールの前を持つ一人をバレエ団の青年が務めるので、そのリードに付き従うだけでいいことから、メモを取るまでもなく覚えられるものだった。

籠は、御座の下のパイプの両端を四方の四人が膝のあたりに保持しながら、運ぶ構造で、屋根には彫刻も施されていて、中世の文化財そのものを模造したもののように思える重厚な代物だった。そして、困ったことは、籠の重さだった。

練習の一度目は、バレエ団の青年のさまに習って片手一本で持ちあげ、歩くことができたのだが、その一回のダメージで左手の握力が減ってしまい、二回目は、途中から右手も助力させて両手を使わないと持ち続けることができなかった。

なさけない思いにさいなまれた。幸いにも、この重労働は、都合一往復することとなる出番部分の回数の練習だけで終わり、次の群

集の一人となるシーンの段取りと明日の集合時刻の説明を受け、人足役は本日の拘束から解放された。

「スィーツモロウ」

ブロンドの女性ダンサーが素敵な笑顔で声をかけてくれた。

重たいです、カゴ

No t O t s u k a r e s a m a

B u t S e e Y o u T o m o r r o w

ブロンドのおねえさんが声かけてくれました
本日のところは、以上！

ミクシー友達の奥さんから、彼女のママ友達の子供たち二人がエキストラに合格したことのコメントを私の日記欄に入れてくれた。謎掛けのような短いテキストに込めたメッセージを解読してくれていて、満足感に浸される。

七月二日金曜日

本日はお衣装つけて、本番舞台での通し稽古。衣装も重かった。

その衣装を着用したエキストラ全員を囲ませて、進行責任者と思われる女性から、「No Sit、No Eat、No Smoke、No Toilet、No Photo、カンパニーライトがある。」と私にもヒアリングできる簡潔な表現でご法度を宣告された。

出番が終わったら、インミーディエトリ、遅滞なく、楽屋出口で出演料を受け取って、退場することを最後に警告されて、エキストラへの説明を終えられる。うわついているところを怖い教師からお叱りを受けたような状態にあったところ、スタッフから袋入りの新品ティシャツを各人一枚配布いただいた。黒地に白文字でバレエ団の名前とマークとこの一連のツアーの都市名が、東京・大阪を漢字で、バルセロナをアルファベットで記載されたシンプルなデザインだったが、限られたメンバーが共有するスタッフティシャツは、この稀有な体験を証明する貴重なお宝

である。みなさんも表情がやわらぐ。

二日目になるとエキストラ同士顔なじみになって連帯感がかもし出されてくる。

欧米人が大多数だったが、バレエができる人がいないようで、控え室待機中に私がいたずらにしたピルエット・ターンで拍手喝采をいただく。

同じ籠担ぎチームでは、外見は日本人なのに、カナダから神戸大学に留学している中国人とイギリス人のハーフだというチェンという青年がいて、英会話のままならない私への通訳役を買って出てくれた。

籠運びの片手持ちは断念して両手持ちで臨むことにした。自分だけ片手持ちできないことで役を降ろされるのではないかとの懸念もあるが、籠を途中で落としてしまう最悪の事態を避けるほうが賢明に思えた。スタッフに訴えて、別のエキストラと交代できれば、私には最も望ましいことだが、その訴えを誰にすればよいかわからないし、わかったとしても、補欠と交代させられる可能性がある。クビだけは避けたい。

そんな懸念を察したのか、チェンは、私が重い籠を片手で持ち続けることができないことをリーダーのバレエ団の青年に相談し、途中で握り手を変えたりしなければ両手でもいい、の了承を得てくれた。

通し稽古では、始めから両手持ちにして無事に終了したが、腰が引けがちになるので、背筋に力をいれなければならない。掌は大丈夫でも腰はもつだろうか。

明日の本番まで、このまま私の肉体になにも異変が起こらないでくれることを楽屋口の廣田神社の神棚にお願いする。

帰りの道々で「インミーディエットリー」の単語がクインズイングリッシュらしいと思い起こし、インミーのミーに高らかなアクセントをつけてインミーディエットリーを頭の中で復唱した。

舞台上手は *right side*

舞台下手は *left side*

お客様から見ての右・左

ハケたあとはインミーディエットリー！

七月三日土曜日

早めに会場に到着したら、少年が一人ぼっちでエキストラ控え室前の通路に所在なげに立っていた。顔つきから計れば、小学生と中学生の境の歳の頃と思われる。男の子のエキストラに違いない。きっとバレエを習っているだろう。

「どこのバレエに通っているの？」と彼に尋ねてみた。

「ツルハラの〇〇バレエ」と、そこに通っていることがなにか選ばれた者しか行くことができないところであるかのごとく少年は自慢そうに答えてくれた。しかし、私は、聞いたことがない教室だった。

「ツルハラって？」

「泉佐野」

「へえ」そんな地名があったことを思い出す。

「遠いところから来たんやな」

会話の途中で、彼の胸のバックステージ・パスの表示が読み取れた。

ボーイ・カバー。補欠だった。出番があるのは、別の子だった。

男性のエキストラにも女性のエキストラにもカバーが選ばれているが、男の子も同様だったのだ。

「おかあさんは？」

「客席」

小学六年生だという彼は、上演中ずっと、バックステージの舞台中継用TVの下で待機していなければならない。

男の子役に選ばれたふたりは、ミクシー友達奥さんのコメント情報によれば、大阪市内の名前の通ったバレエ教室に通う知り合い同士である。それだけに、彼はいっそう一人ぼっち状態を強いられたことがわかった。

オーディションから三日間、子供役のカバーとして一行につきあってきたことになる。ふたりに事故が起これば、出番がまわってくるが、そんな不幸を祈るわけにもいかない。

待っているだけの時間だけが過ぎる。

ズボンに隠れている彼のフクラハギはどんなだろう？爪先から足の甲のラインはどんなだろう？そして、少年のバレエに対する想いは、どれくらい熱いものなのだろう？

成長の反抗期にあるだろうに、自慢げに教室の名前を答える口ぶりからは、親の薦めだけでバレエを続けている時期を越えて、バレエを習うことに誇りを持ち、あるいは人生の目標に昇華しているかもしれない。そうあって欲しいと思う。

出番はきっとあるよ。もっと大切な出番が。バレエのスキルが比べられたわけではないのだから。

舞台袖の客席側のへりの位置に籠が配置されていた。劇中では、観客の記憶に残るかどうかも定かではない大道具だが、見えない場所で存在を誇示するものだった。パイプの持ち手にはベッドシート様の白布が埃よけのように掛けられていた。前日も前々日もそんな丁寧な扱いを受けていなかったのに、本番は違うものだと思ったが、公演がスタートして、その理由がわかる。ダンサーの出入りの際にヒザあたりの高さにあるポールに突き当たらないように舞台袖の暗がりの中で目立たせる役割があるものだった。

その白布が剥ぎ取られて、いよいよ出番がきた。御座のベルベットの覆いが揺れて、御座の主が着席したことがわかった。後手の左側が私の持ち位置だ。客席からは、後手の後になる。

音楽が切りかわった。スローな音楽とかけ離れたリズムで心臓が高鳴る。ただ真っ直ぐ進行方向に頭と視線を固定させ、籠ができるだけ揺れないようポールの水平を意識して、背筋を伸ばして行進した。舞台中央で一度、籠を下ろして、御座の主を降ろし、籠を持ち上げて、下手舞台袖に運び入れた。

イメージしていた最悪の事態など起こることもなく、次の搬入出シーンも大過なく終え

て、両家の若者たちの決闘シーンの出番に臨んだ。こちらは、群集の一人となって、舞台後方で右往左往するだけなので、楽しみにしていた出番だ。

舞台は市場である。まずは、男性ダンサーの町衆たちによる爽快な群舞が繰り広げられる。その踊りのさなか、舞台後方に組み立てられた大階段の上に酒ビンを手でティボルトが登場し、ブラブラと階段を降りてきて、中段で酒を飲み干し、無法にも酒ビンを群集に投げ入れ、市場の空気を曇らせる。そして、マキューシオとの決闘に至る。

決闘シーンはフェンシング・ゲームのように剣を交わしながら、舞台左右をふたりが戦いの優劣を変えながら行き来する。市場に居合わせた街人たちは、息を飲んで見入るように、舞台の後方で決闘の動きに合わせて右往左往する。

動く背景だった。背景の一人として、舞台後方から舞台を見入ることができる。ティボルトとマキューシオの後方には客席の辺縁のない広大な暗黒。

こんなところに、立っているのだ。

マキューシオがティボルトの卑怯な剣の餌食となり、息絶えたかと思えば、何度も立ち上がる修羅場の演技を続け、崩れ落ちようとするマキューシオの胸にピン・スポットの照明が注がれている。私にも自分の体の中から頭の先に発光物が突き抜けた。

収斂する音楽とともにマキューシオが息絶え果てた。盟友の死を嘆いたロミオは、マキューシオの剣を拾い上げ、ティボルトに挑みかかり、今度は、ティボルトがロミオの剣の餌食となる。それが私の出番の終わりで、セットの隙間から舞台を退却した。

衣装を脱いで、次の三幕にも出番のあるエキストラ仲間に挨拶と握手をして、インミディエトリに楽屋入口に出て、待機していたスタッフから出演料と源泉徴収票をいただいた。

楽屋口を出ると、衣装をつけたままのティ

ボルトが煙草を吸っていた。私と目が合って、口元をニヒルにゆがませ、やわらかなまなざしを作ってくれた。

公演のパンフレットを出演記念に入手しようとホールの外壁を伝ってホール正面入口から入場したら、ピロティのベンチに少年三人が並んで腰掛けていた。出番のあったふたりと泉佐野の少年だ。

観客の姿はないことから、幕間の休憩時間が終わり、三幕がスタートしていることがわかった。

少年たちは、客席で観客となっている親御さんを待っているのだった。親御さんたちは、今、ロミオとジュリエットの悲劇の舞台に夢中になっている。

こちらは、静かだった。音楽がない。

エキストラとして同じ舞台に上がって、オーケストラの音に今しがたまで身を包まれていたのに、劇場の扉の内と外にこんなに大きな場面転換があった。

不思議な立ち位置。

最後の三幕は始まったばかり。まだ、ロミオは死んでいない。

ベンチに並ぶ三人を 아이폰 で撮影した。三人が三人ともピースサインと笑顔を向けてくれた。

ふたりには、コメントをくれたミクシー友達の奥さんを通じて画像データを提供することができるだろう。泉佐野の少年には、鶴原の教室にデータか現像を送ってあげよう。

泉佐野の少年がふたりと友達になったのかどうか、尋ねることができなかった。

「インミーディエトリー」と自身に声を掛けて、そそくさと西宮を後にして、週二回通う寺田町のバレエ教室のレッスンに遅刻することなく参加できた。月末に門真のホールでの発表会が控えている。しっかり踊り込んで、舞台を迎えよう。

籠運ぶ人終了

マキュー塩とともに発光しました

樹理エットとは舞台でもバックステージでも
すれ違うこともなかったのが残念

それから約半年後

ロイヤルバレエ団の「ロミオとジュリエット」の東京公演の録画がNHKで放送された。籠は二台だったので、キャピロット家の奥様がモンタギュー家の奥様かどちらかを担いでいるのだろうと思っていたが、どちらでもなく、ロザラインだった。ジュリエットに出会う前のロミオあこがれの美女である。

南無帰命頂礼、今こそロザライン姫が明眸にかけ、

高々と聳（そび）ゆるオデコにかけ、

紅なす唇にかけ、

さてはかの美（あで）なる足音、

直（すぐ）なる脛（はぎ）、

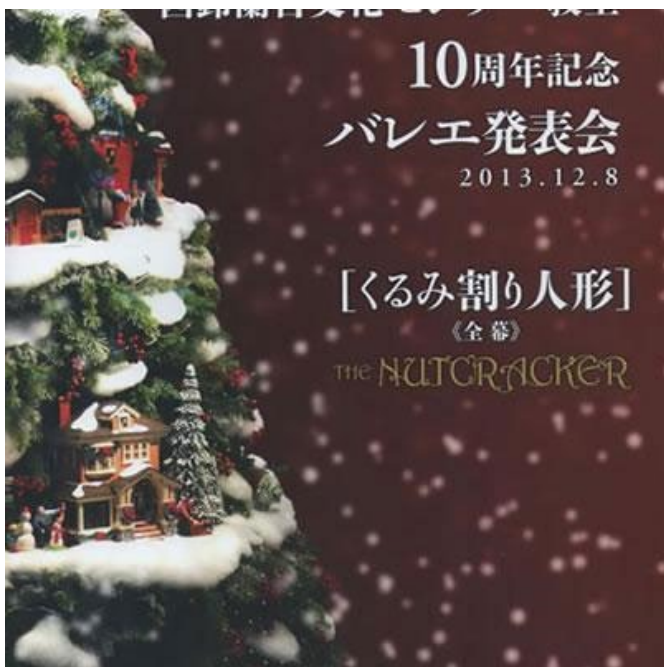
わななく深股（ふかもも）、

ついでには、かの辺りの禁断の内庭にかけ、
いでや、真の姿を現わしおろうぞ

…中野良夫訳・マキューシオのセリフから



（2011年9月）



S先生の運営するバレエ教室は、六甲山の山間を切り開いて開発された住宅地への入り口となる駅の、その駅前のスーパーマーケットのビルの一角にあるカルチャー・スペースを拠点にしている、JR環状線・寺田町に本部のある法村友井バレエ団経営バレエ教室の一支部に位置づけられている。

支部教室は、大阪をはじめ関西一円に開設されていて、S先生のようにバレエ団所属のダンサーが「教え」を勤め、生徒募集その他もろもろ一切を任されている。

次の発表会で教室開設十周年の節目を迎えるので、メインのプログラムには「くるみ割り人形」をすえるが、男性ダンサーをひとりでも多くキャスティングしたいという理由で、バレエ団の男性ダンサーをはじめ、本部のジュニア科教室の活きのいいニイチャン連中に加えて、本部の教室に通う夜学生のような存在である私にもS先生から本部教室の先生を経由してゲスト出演の依頼があった。

梅田からでも神戸電鉄沿線のその駅までは、一時間かかる。自宅の天王寺からはさらに三十分を見ておかねばならないので、往復だけで三時間、リハーサルは一、二時間としても、この支部教室通いは、ほとんど一日仕事となったが、本番まで数回のその一日仕事は、楽しいものだった。

新開地駅など下車したことがなかったところを時間調整で散策したり、ランチ処を探したりするささやかな発見もあったし、なにより、生徒たちプチプリンセスと同じ時間同じ空間を共有できるのが、初めての経験で、かつ、貴重なものだった。なにをしても微笑ましい幼児からすでにレオタードの下胸のハリもイメージできる若葉な淑女たちまでに取り囲まれるのは、あたかも、印象派画家のドガがパリ・オペラ座の中の稽古場に入り込んでバレリーナのデッサンに打ち込めたのと自分的には同じ特別に選ばれた者しか立ち得ない居場所である。男としての回春効果効能あらたか、マハラジャの王侯もかくや、聖隷たる執事の気分もかくや、あるいは鼻血ブーな

マンガ・モードにひたらせてもらえる。

リハーサルには、生徒のお母さんの多くも立ち会っていて、その初回にはセンセイからの紹介を受けて、生徒たちとお母さん方に向けて、自己紹介した。少女たちはお決まりのレッスン・スタイル（黒のレオタード・頭はシニョン）で顔と背丈とスタイルに少しずつバリエーションはあるものの一人ひとり差異化して認識することはかなり困難な作業でできそうにないし、おかあさん方の方は、年齢相当のバラエティはあっても、こちらと同じく一人ひとり差異化するには、相当な時間が必要である。一方、彼女たちは、ゲストたる私の名前も姿も認識いただいていて、幼児から見れば祖父に相当しておかしくない年長のダンサー氏がどんな体のさばきを見せるのか、きっと興味深く見つめてくれる。カッコよくふるまわなければ、というプレッシャーを感じつつ、仲間うちとして許容してくれるはず、何をやろうが、異質さゆえの新鮮さと受け入れてくれるだろうと自身に甘えつつ、こちよい高揚感に満たされる。

「くるみ割り人形」は、バレエ団の団長が開演あいさつの際によく口にする言い回しを引き合いにだせば、チャイコフスキー作曲の三大バレエのうち 最も音楽がすぐれているもの（「白鳥の湖」は、最も有名なバレエ、「眠れる森の美女」は、最も美しいバレエ）で、音楽のバリエーションの豊かさとその音楽を形に変えるダンスも変化に富んでいることで、観客を飽きさせない。クリスマス・パーティを舞台としていることもあいまって、踊る方も見る方も子どもたちにお勧めの演目である。

私の役は、シュタールバウム家のクリスマス・パーティに招待される客人ファミリー数組のうちの父親だった。

胸前のあわせにフリルのついた白のブラウスの上に軍服風のジャケットを羽織る。ジャケットには、勲章が数枚縫い付けられていて、公爵キツチュなファッションで、長いブーツもかっこいい。貴人然と気取った振る舞いが期待されている。

もみの木のツリーを背景にパーティの主役である子どもたちに寄り添う立場で子どもたちだけの舞台の不安定さを鎮めるバランスーとして機能する。踊りは二の次で、大人がその場に居ること、存在自体に意義がある。

バレエダンサーとしての踊りの出番はほんの数小節、フォークダンスのような、社交ダンスのような、大人の男女が輪になって回るだけだったが、そのあとにピンのスポットライトを当ててもらえる出番を提供してくれていた、ドロッセルマイヤのマジックの助手として。

ドロッセルマイヤがパーティに紛れ込む。バレエ団のベテラン・ダンサーが扮するマジシャン・ドロッセルマイヤはお得意のマジックをパーティの客人を相手に披露する。

ドロッセルマイヤが舞台上手で観客の注目をあびているときに客人のひとりである私は反対の下手に引っ込んで、舞台裏でスタンバイしているアシスタントさんから背中にネタを仕込んでもらってしずしずと舞台下手に戻る。

ドロッセルマイヤは、上手での演技を終えて、振り返って下手に向かい、私と対面し、つと背中に手をのばして、仕込んであった大きくてカラフルなペロペロ・キャンディを取りだして、観客の賛美を得るようにキャンディを中空に差し上げる。

もともとフォークダンスのような、社交ダンスのような踊りの際に公爵衣装で舞台センターで凛々しく歩き回ることによって衣装に異物がついていないことを伏線のようにプレゼンして、カラフルな異物が背中にまわりついていてなかったはずなので、マジックになってはいる。

背中から異物を取り出された私は、きどったドロッセルマイヤに向かい、どうなっているのか？ 何が起こったのか？ 上体をくねらせて、不思議がるマイムを続ける。子どもたちも私を取り囲んでげんそうマイムをしてくれる。

ドロッセルマイヤは私に対し一礼したあと

私から離れ、舞台中央に歩みを進め、スポットライトもそのあとを追うので、私は、また死角となる影のスペースに溶け込んでしまう。

舞台は進んで、次は、ドロッセルマイヤの指揮でムーア人形とバレエ人形の人形ぶりダンスが展開されるシーンに転じる。さらにはくるみ割り人形が少女クララにプレゼントされ、ところが、イタズラものの兄弟フリッツとのいさかいからくるみ割り人形の首がもげてしまったり、これをドロッセルマイヤが修復したりとワザワザな作り事が繰り返され、パーティはお開きとなり、客人たちは家路につく。子どもたちはプレゼントをかかえ、大人たちは、ほろ酔いかげんで舞台からソデにはけていく。これで、私の出番は終了する。

その後クララは眠りにおちて、一幕が終了し、二幕では、クララは夢の中の世界にいざなわれている。

ドロッセルマイヤを演じるベテラン・ダンサーは、女の子を担ぎ上げるなら、一度にふたりでも苦もないだろうと思わせるような隆々とした上体の持主で、だからこそ、スラリとした王子役は、年齢面もあって、もう回ってはこないが、どんな演目でも必ず重要な男性の脇役はあるもので、年季があってはじめてこなせるようなキャラクタ・ダンサーと総称されるダンサーのその代表選手である。ダンス・テクニックはもとより、マイム演技も手練となる。

セリフをいっさい活用しない不自由な表現手段であるため、総じてストーリーに乏しいバレエながらもストーリーを描きあげることに欠かせない存在で、ドロッセルマイヤなどは、まさにその典型となる役柄である。

◇◇◇

世界のバレエ公演を一巻一枚のDVDとブックレットで隔週発行されていたディアゴスティーン社の「バレエDVDコレクション」の刊行が今年一月に終了した。このコレクション通算六巻のうち「くるみ割り人形」は、四巻ある。

複数刊行の演目は、ほかには「白鳥の湖」と「ジゼル」と「コペリリア」がそれぞれ三巻で「くるみ」がいかに人気のある演目かを示している。

○英国バーミンガム・ロイヤル・バレエ団版
四巻の中では最も原型的なものと思われる。

ドロッセルマイヤは子どもたちの輪に入っ
てその体に手を差し伸べ、子どもたちの衣服から次々とハンカチを取り出していく。それぞれ子どもたちの服にあらかじめ仕込まれているものと思われる。ハンカチを投げ入れた箱に手を入れて、中からメートル四方はある巨大なハンカチを引き上げる。小さなハンカチが仕立て直されたようにマイムの流れの中で見せるのが肝心なところであるが、箱の中にあらかじめ仕込まれているものであるのも明白だ。

その次のマジックは、銀色のボールの空中遊泳なのだが、DVDではちょうどボールをクローズアップで映し出して、ボールを保持する鋼線がモミの木の枝から伸びだして光ってしまう瞬間がある。ネタバレそのものの映像となってしまうていた。ライブの舞台なら、夜目遠目で鋼線まで判明しようがないところ、とんでもないカメラ・ワークのせいで台無しだった。

マジックのあとは、ムーア人形とバレエ人形をお披露目するシーンに移り、それぞれの人形に扮するダンサーが粹を凝らした人形振りダンスを楽しませてくれる。手足は木のように固めて、関節はときおりバネのように振動させ、そのフリはばにメリハリをつけて、これを音楽に乗せて。

○ベルリン国立バレエ団版

傘をさした紳士が舞台上空からしずかにフロアに落ちてきて登場するのが、幕開き冒頭シーン。これがドロッセルマイヤでくるみ割り人形を片手に抱えているのがわかる。異質感きわだたせる演出だった。

パーティへの侵入時は、天眼鏡のような小道具を頬にかざして、音楽のリズムと離れて独自のペースで一歩一歩クララに歩み寄るこ

とで魔性度合をあげている。

ただし、パーティの場での小手先のマジックはしなくて、人形振りの導入のため、大きな箱を三個並べて、その上で糸あやつり人形を数体ふらふらさせる。これに合わせて箱の中でダンサーが人形の動く振りを影絵にして踊り始め、音楽の変化とともに箱から飛び出して人形振りダンスを続ける。その後は、ドロッセルマイヤ自身が、素軽い可憐なダンサーとして誇らしげにダンス・スキルを繰り出す。

○マッシュ・ボーン版

マッシュ・ボーンは、ゲイの白鳥を誕生させるなど古典バレエの破壊と再構築で人気を得たイギリスの演出家で、この「くるみ」もオーソドックスなものからは大きくデフォルメされていて、ドロッセルマイヤは登場しないで、そのかわりドロス博士なる孤児院経営者がその妻とともに孤児たちのかたきのような存在として登場する。音楽がチャイコフスキーの同じものであることとクリスマス・プレゼントをめぐるストーリーであることがオーソドックスなものと同期するだけの新解釈のものとなっている。

こちらはくるみ割り人形にあたるのが、アメリカン・コミックから抜け出したようなアイビー・ルックの青年人形で、この人形振りダンスは、手・足がまさにマンガのようにビュンと伸び縮みするように見せる不思議な踊りで、斬新さを加算するものだった。

○サンフランシスコ版

ご当地サンフランシスコが舞台とされ、セピア・カラーの写真が西部開発時代のご当地の出来事である設定を用意する。

幕開きは時計店の店主ドロッセルマイヤが客の応対をして、その後店をたたむところで、一段落となる。続いて、シュタールバウム家のパーティに移るが、大人男性の衣装が三つ揃えのスーツ姿で、衣装というよりファッションというべきものであるところが、アメリカアレンジらしい。ドロッセルマイヤもなにかせかせかしたタイプで魔性度合は薄く、神

秘性はない。

マジックの方は、まずはハンカチーフをそろそろと繰り出すものと、杖の空中遊泳という定番のもの。そのあとには、子どもたちがプレゼントでもらったバレエ人形・ピエロ人形・くるみ割り人形を大きな箱に入れると、箱からは人間の大きさに巨大化されたバレエ人形・ピエロ人形・くるみ割り人形がそれぞれソロで人形振りダンスを展開する。

手足は木のように固めて、関節はときおりバネのように振動させ、そのフリはばにメリハリをつけて、これを音楽に乗せて。

◇◇◇

小さな教室のささやかな発表会でいいので、一度はドロッセルマイヤをやりたいという想いを抱き続けている。

黒のフロック・コートと大げさな黒マントのオーソドックスないでたちで、黒のアイパッチで片目を覆い、もう片方の眼力を際立たせる。歌舞伎の隈取のようなメイクも工夫できそう。

そして、あっと驚くマジックをみせる。ああ、マジックのネタを仕込まないと。

「おれたちは、こどもたちに喜んでもらってなんぼやから」

本番の日、男楽屋でドロッセルマイヤ役の先生が共演者たちに語りかけた一言が忘れられない。

だとしたら、マジック教室にも通学しないと（笑）

（2014年7月）

カウボーイの踊り

バレエ「くるみ割り人形」には、ロシアのコサックダンスに想をえた男子ダンサー数人によるダンスが挿入されている。クリスマス之夜に少女クララの夢のなかで展開されるパーティの出し物のひとつだ。

コサックダンスができるほど足腰が強靱ではない、われわれ中年男組の出演するジャズダンス公演のわがセンセイ演出になる「くるみ割り人形」には、ロシアの踊りの代わりにカウボーイの踊りが登場する。

カウボーイたちは、それぞれ馬を模した小道具を携えて、馬の走るさまどおりギャロップしているか、馬を正面位置から見せるように足を広げた二番ポジションからの小さいジャンプを繰り返すかが二分ほどしかないこの出番の大半を占め、ダンスらしい動きはエイトカウントかけるところの四程度あるだけである。

男組の踊りだけでは観客を魅了するテクニックに欠けるので、小道具との合わせ技で馬をどれだけ生き活きと見せることができるかが、センセイの狙いであるそう。

センセイが主宰するダンススタジオによる市民ホールでの公演には、ダンサーだけで百人を超える老若男女が出演する。男女といっても、男は、バーのマスターのエガワさん、エンジニアのイシイさんと公務員の私とあと一人、武井君。武井君以外の三人は、すでに五十歳台に突入しているが、武井君は、三十六歳。設計事務所に勤務する建築士。

勤務するといっても、事務所はおやじさんが代表である。両親との同居で、およそ生活への苦勞を想像させない御曹司である。

五年前に知り合ったが、スタジオでともに汗を流すダンスだけの繋がりとはいえ、女性だらけの中、圧倒的少数派の男同志の契りみたいなものができていた。

彼は、当初から今にいたるも、バレエ担当の美人インストラクターに片思いを続けていて、美人インストラクターとねんごろになることをおっさん連中は応援するのだが、彼女



は、センセイを習って、ダンスのミューズに人生を捧げているのか、両者の距離が縮まる気配がない。

まわりにはたくさんの女性がいることだし、武井君もほほほのおねえさんで手を打ったら、そこそこの伴侶を獲得することができるだろうに、ご両親も喜ばれることだろうにと、ハタ目に観察するが、目標を下げないプライドの持ち主である。

年に一度のペースでの公演を重ねていくほどに、それぞれの個性に応じた役割分担が確立されてくる。武井君は、美術担当なかでも小道具制作である。

今回は、馬を作ってくれた。

四頭の馬と四人のカウボーイが「夕陽のガンマン」のテーマのような口笛がリードする音楽にのって、舞台上でひと踊り、最後は舞台下手に競馬レースのように鼻づらを並べて四頭横一線になって、舞台上手へ競い合いながらギャロップで横断する。

その馬は、頭と首だけ。カウボーイたちが片手で制御できるように首は細い棒でよい。センセイの注文は、張子の虎の頭のように頭部が上下に揺れ動くようにして欲しいというものだった。

武井君は、円筒型にまるめることができる切り込みの入った発泡スチロールを入手して、これに厚紙を貼って頭部分をつくり、細いパイプを首にした。そして、頭と首の接合には、コルク栓に竹ヒゴを貫通させた部品を作った。コルク栓をパイプに押し込んで、竹ヒゴを頭のほった部の内側に当たる位置に突きさして、完成品となる。発泡スチロールに突き刺さっているが、固定されていないので、車軸の役割を果たしていた。

さらには、パイプにクリップをはめて頭の上下動する範囲を限定する工夫も加えている。

頭には、厚紙を発泡スチロールに張り付けて、同じ厚紙を切りだして作られた目と耳が貼り付けられる。目は、白と黒の正円で、耳は、長い三角形である。

建築士だけあって、象徴的で計算づくの構造物はお手のもの、制作の楽しさが伝わってくる優れものだった。少々無機的な顔立ちに不満を感じたが、専門家の労作に対する批評は控えざるを得ない。

ただし、パース制作と似て、持ち運びのため分解できるのはありがたいのだが、軸の竹ヒゴとかが脆弱なので、練習を重ねるうちに壊れてしまって、本番まで耐用できるのか、皆が不安に思う代物でもあった。武井君も大丈夫とは言わないが、壊れたら補修すると約束してくれる。

リハーサルは、毎週日曜日の夕方からを定例に、半年近く続けられ、本番一か月前に本番会場の市民ホールで通し稽古が行われた。終了後、そのビデオをチェックして、センセイは個々とりどりのダメダシと呼ぶ変更指示を出される。

そのひとつが長さ30センチぐらいだった「馬の顔が小さい」という指示だった。上からなにか貼り付けて、大きくすることができるでしょ、と乾いた口調で依頼される。反論はできない。センセイのダメダシには、絶対服従である。

武井君はほかにも手間のかかるダメダシをかかえたため、武井君に作り直しをお願いする雰囲気はなかったので、四人それぞれが馬の頭を大きくすることになって、その日は解散した。

わたしの馬は片目を失っていたので、画像データのメール送信を依頼した。

こちらには、適当な厚紙がないので、翌日、仕事の帰路、素材探しに百元ショップに立ち寄った。

ウレタン系素材でできた二リットルのペットボトル用ホルダーが馬の頭に見えた。これと同じ商品ラインのブリーフケースもあって、ホルダーを長い鼻から口のあたりの部分に、ブリーフケースは切断して、頭を大きくする部分や耳などにできる。

さらに、馬には、ハミと手綱があってよい。ハミには英単語カード用の丸リングを、手綱用にリボンを購入した。

さらにさらに、店内をうろついていたら、ツケマツゲを発見した。こんなものも百円で売っているのかと感心していたところ、競争馬のつぶらな瞳の美しさをインスパイアして、馬の目玉用に使える白色のプラスチック・カバーのついた安全ピンともに、ツケマツゲセット購入した。

まだまだ掘り出しものがありそうだとウロウロしていたら、バニーガールのコスプレ向けのうさぎ耳のカチューシャを発見した。屹立した耳の内耳部分にピンクの布が、外側は白の起毛素材で囲われている。馬の頭は黒なので、白い部分を黒く色付けなければならないのが手間だが、形が気に入ったので、追加購入した。しめて六点、六三〇円なり。

帰宅し、作業開始。ペットボトル・ホルダーに発砲スチロールの頭を鼻先の部分から挿入すると、ちょうどよい加減に包みこんでくれた。ブリーフケースをはさみで切り裂いて、頭の上部に貼り付け、サイズを大きくした。

あとは、ハミと手綱のリングとリボンで、荷造り紐の役割も果たさせ、骨格が完成した。白色のカバーに油性マジックで黒い目玉を書き込む。ツケマツゲには、脱着できる接着剤が塗られていて、思うところに貼り付けることができた。黒のペットボトル・ホルダーの上に置いてみたら、つぶらな瞳ではあるものの、馬らしい真剣な眼光に見えてくる。

客席から馬のマツゲを判別できるのは、草原の狩人たるマサイ族ぐらいだろうが、みずから改良して、イメージどおりの馬の頭をつくることができた。元のマンガチックなものからアートな馬に変わり、愛着もひとしおのものとなる。

次のリハーサルの日、馬の頭を改良したものを持ち込んだ。

センセイのチェックを受け、了解を得たが、

武井君は、開口一番「目が小さすぎるよ」「そんな耳、馬じゃない」と酷評する。

原作者の承認範囲を超える改変をほどこしたことで、彼が不機嫌になる気持ちを押し量ることができたが、本人は、気に入っているし、彼からは、耳の画像データが送られてこなかったことから、そちらにも落ち度があるよ、と内心でたしなめながら、「ますますでしょう」と受け流した。

そして、その数日後、センセイからケータイ・メールをいただいた。

「こんにちは。先日はお疲れ様でした。残す時間でしっかり固めていきましょね。さて、ちょっと気になっている事を…武井さんの事です。社会にもまれた事がない彼の行動や言動、性格など私が見ていても、ん？となる時が多々あります。男組のメンバーは彼より数段社会経験を積んでいますのでそんな彼とうまく付き合ってくれているのかと思っています。本当に大丈夫ですか？女性とは違い男性は細かい所にはこだわらないでしょうが目に余る態度な時はガツンと言いますのでオカフジさんも振り回されない様にして下さいね。そしてシュネターンで回りすぎて正面を間違えない様にお願いします。」

日ごろは、無味乾燥な事務連絡しか送信されなかったのに、これには、「了解しました」の定番レスができなかった。蛇足の一節も、気に入らない。

人間関係までダメダシされても、それは、センセイからレッスンされていないですよ。

本番。

ギャロップで下手から舞台に飛び出して、馬の頭を振ったら、ブチッという音が聞こえ、頭が首からはずれかけ、あわてて、あいている右手で取り抑えた。

首のパイプからコルク栓がはずれたのだ。

頭を上下動させることができない、しまったなあと出番前の点検不足を嘆きつつ、舞台センターに踊り出たら、今度は、前にいるエガワさんの馬の首が飛んで、舞台の床に転が

った。

カウボーイはマジな表情で、とセンセイから指示されていたが、観客とともに笑わずにいらなかった。

(2009 年 3 月)



2021 年 1 月
DANCETECTURE

